
似た者同士

快流緋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

似た者同士

【Nコード】

N5945C

【作者名】

快流緋水

【あらすじ】

両親から退社ギリギリに届いたメール。その内容は？その後は？そのメールが引き寄せた運命の糸？

今日の仕事を終え、パソコンを切ろうとしたその瞬間。
ピピッ

メールが来た。お得意様から注文の品の催促なのか、苦情なのか、
発注なのか。いや、発注時間はもう終わっている。じゃあ…？
早く帰宅したい思いに駆られながらも、仕方なく開く。
気づいてしまった俺の馬鹿。

これからリゼンブルでお食事会です。断るなんて考えないことよ。
待っていますからね。

今開いてよかったよ。というか、帰るギリギリに送るなよ。見れ
なかったかもしれないし。本心としては、見たくないんだけどね。
深いため息。

仕方ない、行くか。
疲れた身体を伸ばし、上司にひと声掛けて退社する。やけに疲れ
ている俺を見て上司は心配してくれたが、それで解決するなら万々
歳だ。

リゼンブルという所は両親が経営するレストラン。都内だけでは
なく、全国に、そして海外にも出店するほどの大企業だ。
そして、ここでお食事会ということは、イコールお見合いという
ことであつた。

跡取り息子の俺がなかなか結婚しないのを憂慮して、半年前から
月に2回ほど連れて来られている。この間のお見合いは会議で行け
なかったから、次の日両親に嘆かれてほんと困った。あれには参

る。けど、あの姿を見ちゃうと本当に大企業の社長か！？って突っ込みたくなる。突っ込んだら、さらに2日は嘆いたかもしれないね。何でそんなに結婚させたいんだか。そりゃもう少しで30にはなるけど、そこまで深刻になるほどでもないし。それに、今の仕事を楽ししくてしょうがない。よそなんか見てられるか。

ため息まじりでリゼンブルの入りに口に向かうと、着物を着た母が待っているのが見えた。正確に言うとう、待ち構えていた、だろう。しっとりとした和服美人なのに、身内にしか分からないピリピリした雰囲気。いつになく怖いね。

「ネクタイが曲がっておりますよ。」

開口1番がこれと来た。やだね。

「すいませんね。」

ネクタイに手を添え、きちんと直す。

「それから。」

今度はなんだよ？

「めがねが曇っておりますわ。お拭きなさい。」

舌打ちをしそうになるのをかろうじて抑え、めがね拭きを取り出して拭く。

「よろしい。会社の同僚や同級生とのお食事会とはまったくの別物です。心してお話を聞き、返答なさること。いいわね？」

俺はどうしてこんなところに生まれたんですかね？やんなるなあ。

「はいはい。」

「分かっているようですわね。返事は1回。」

にっこり笑いながらキツイ口調。怒鳴られるより怖い。

「はい。」

来てしまった俺も俺だ。演技をして過ごせばいいや。

リゼンブルの中に入り、いくつかの角を曲がって個室に通される。夜景が随1と言われている部屋だ。美味しい料理をありがたく食うか。

「お待たせして申し訳ありません。」

入り口で頭を下げると、一瞬母が驚いたように見たが、すぐに表情を隠して微笑んだ。きっと俺の対応に喜んだのだろう。

俺が座るとお互いに自己紹介をした。大学と今の企業、あとは趣味ぐらいしか言っていないが、相手の両親は納得したように頷いていた。彼女は大学と趣味しか言っておらず、すぐおとなしそうに見えた。

自己紹介が終わった頃、前菜が運ばれてきた。ただし、俺と彼女の分だけ。

「私たちはよそで予約をしているので失礼するよ。」

「あとはお若いもの同士で。今日は帰らなくてもよろしくてよ。」

彼女の母親がとんでもないことを口にした。俺も彼女も目が飛び出るほど驚いた。

「何を言っているの、お母様。」

「そうです。ちゃんとお送り致しますので。」

「あらそお？まあ、ごゆっくり。明日はお休みですものね。」

「それでは失礼する。」

両親たちがやたらニコニコとしながら退室する。気配から察すると完全に店から出て行ったようだが、何を狙っているんだか。盗聴器なんてついていないだろうな？

いぶかしむ俺の表情を見て、彼女がクスリと微笑んだ。

「ご両親の前と、今は表情が全く違いますのね。」

「いや、そんなことは……？貴女も？」

彼女はにやりと笑んだ。それがまた、よく似合っている。しかし、卑しい感じはない。

「堅苦しいのは嫌いなんです。だから、花嫁修業として言われているお花やお茶は一切しておりませんわ。和食で1番と言われている料亭の娘としては、あるまじきことなんでしょうけれど。」

きっぱり言う彼女が凄く清々しく感じて、好感が持てた。

「俺ですよ。この家に生まれたのは間違えじゃないかって言いたくなるくらい、大雑把で堅いのが嫌いで気まぐれなんです。」

彼女は微笑んだ。

「そうでしょうね。今の方が生き生きした表情をしていますもの。」

「それはお互い様でしょう。」

「そうね。さ、両親がいないからざつくばらんに話しましょうか。」
こざっぱりと言い、前菜に手を付けた。

その後、食事をしながら話し込んだ。お互いに猫かぶっていた最初とは違って、素の自分だ。

「え!?! 写真も見ずにいらしたの?」

「今日がお見合いと言うことも知りませんでしたよ。いつもお見合いはいきなりなんです。急に呼び出されているので。」

そう、俺はいつも相手の写真は見ていない。それなのに、相手にはちゃんと写真が渡っている。俺の写真がどこまで行き渡っているのか、ちよつと怖いね。

「よく来れるわね。」

「来ないとうなるか分かります?」

仔兎のように可愛らしく首をかしげて考える。

「そうねえ、次の回から首輪でもはめられて来る羽目になるんじゃないかしら?」

うわ。綺麗な人だけど、なかなか過激なことを言うなあ。

「それは真っ平ごめんですよ。前に断ったら、次の日ずっと俺に付きまといて嘆いていたんです。あれは嫌ですよ。」

眉をひそめる彼女。想像して寒気がしたことだろう。

「あのご両親からはそう思えませんか。お互い両親に難儀していますわね。」

「まあな。」

食後のデザート、コーヒーもしっかりおなかに収め、店をあとにする。

最初のおとなしそうな雰囲気は全くなく、よくしゃべる彼女。クルクルと変わる表情。話しても、見ていても飽きない。俺がこう思うのも珍しいかも。

「あゝ美味しかった。ご馳走様でした。」

「いや。これからどうしますか？」

元カノにこう言ってから何ヶ月たったかな。ふとそんなことを思った。今までの見合い相手には決して言わなかった。

「そうね。スカイラウンジでちよつと飲みませんか？」

「いいですよ。」

最上階に上がり、夜景の見える席で乾杯する。

「さっきのお部屋も綺麗だったけれど、こっちもなかなかですね。」

「そうだな。」

きらきら光る摩天楼を前に、2人はゆっくりとカクテルをのどに通した。

「さっきはワインでしたけれど、本当は何が好きなんですか？」

「んー、日本酒ですね。」

「しぶつ。」

笑いながら言う。

「じゃあ、貴女は？」

「んー、俗に言う最初はビール。その後は日本酒。」

「お互い様じゃないですか。渋いですよ。」

酔いのせいもあって、陽気に笑う彼女。

「そうよね。」

「まあ、好みですから。好きなのを楽しく飲むのがいいんですよ。」

「そう言ってくれたのは貴方が初めてね。」

笑顔からちよつと真剣な表情になった彼女。

「いつもオヤジくさいって言われちゃうんだもの。こういうカクテルを飲む人が可愛いって言われたわ。」

「偏見だな、思い切り。」

「そうよね。ふふつ、よく気が合うわね。今日は乗り気じゃなかったけれど、来て良かったわ。ありがとう。」

お札を言われてちよつと面食らったが、素直な彼女が良かった。

「いいえ。俺はいつも乗り気じゃないんだけど、今日は楽しかつ

たですよ。」

「そうね、たまには両親に感謝しなきゃ。」

「そうですね。」

猫かぶりから脱して、素な自分たちで、ゆっくりを時を過ごす。この時を提供してくれた人に少しは感謝しよう。

いつもはお節介でも、少しくらい感謝しなきゃね。

その後、共通の好み・日本酒について語り、今日が初対面と思えないほど打ち解けていた。

「わざわざ酒造から取り寄せるなんて。本当に好きなんですね。」

「美味しいものはやっぱり手に入れたいでしょう。今度一緒に飲みませんか？ こういう席より堅苦しくないし。」

彼女は嬉しそうに頷いた。

「こういう所はお洒落で好きなんだけど、寛げないんですね。ぜひ、一緒に飲みましょ。」

「あ、じゃあ番号を。」

携帯電話を出すと、彼女が驚いた表情をした。

「どうしました？」

「同じです、それ。」

高そうなバッグから出した携帯電話は、確かに俺と同じ機種で、しかも色まで同じで合った。

「凄いな、ここまで来ると。」

「似た者同士ですね。」

「だな。」

顔を見合わせ、笑い合った。

こんな偶然も、たまにはいいもんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945c/>

似た者同士

2010年12月9日14時34分発行